

殺戮者が斬る！

またたび猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝国最強、『エスデス将軍』と『ブドー大將軍』
と帝国の誰もが知つてゐる。だが、その二人以外に
『地位』や『名誉』、『勲章』、更には『誉れ』
などには興味はなく『表舞台と言う盤上』には
絶対に上がつて来ないで日も当たらぬい真つ黒な
『裏の世界』に影に隠れそして潜み続けた
『もう一人の帝国最強』がいた。

そんな彼は今になつて表舞台の盤上の上に立つ。

目

因縁邂逅編

再会を斬る

悪鬼なる者と無力なる現実

次

80 1

因縁邂逅編

再会を斬る

人が次第に朽ちゆくように國もいづれは滅びゆく
千年榮えた帝都すらも今や腐敗し生き地獄。
人の形の魑魅魍魎が我が者顔で跋扈する。
天が裁けぬその悪を闇の中で始末する――

帝都。

千年前、時の始皇帝が統一、建国した帝国の首都。
中心には莊厳な宮殿がそびえ、宮殿を取り巻く
ように都が展開している。

けれど千年という長きに渡つて繁栄してきた

1 再会を斬る

帝国は、腐敗の一途を辿っていた。

まるで末期の病魔の如く国を貪る
悪、悪、悪……。

苦しみ、絶望し、涙を流す民衆達。
けれど、彼等の言葉が聞かれる事はない。

横行する腐敗政治は止まることを知らず、
人々は圧政の中苦しみ続けるしかなかつた。

「はあ……何度来ても相変わらずの胸糞悪い

趣味だな…帝国は…」

帝国の宮殿で漆黒の刀を腰差して紺色の軍服を着ていた。一人の少年は悪態をつきながら帝都の宮殿の廊下を歩いていた。

そして青年は玉座の前の扉について

「失礼します。召喚の声に応じ来ました。」

青年は扉を開けてそう言うと

「おおお!!? よく来てくれましたねえ!!?」

一人の青年は玉座の間に入ると目の前にはかなり

肥え太つて更に左手には齧った後のとても大きな骨付き肉を持つていてそして右手で青年の肩をぽんぽんと肩を叩きそして大袈裟に両手を広げて高笑いする。

「国境の砦から遠路遙々と……よく!!? よく来てくれましたね!!? これで安心ですよ!!? 陛下!!?」

「うむ。確かに大臣の言う通りだ!!?」

「これからも其方の働きに期待しているからな??」

「陛下にそのような言葉を言つて貰えてありがたき幸せです……」

青年は膝地につけて傳きながら視線を王座に向けると玉座に座っていたのはまだ幼い少年だつた。聞いていた通りだが……予想以上に子供だつた。見た目も、雰囲気も。

「うむ!!? 其方の逸話などは大臣から色々と詳しく述べていたからな!!?」

「…色々、ですか……?」

青年は傳きながらも皇帝陛下の言葉を聞いた瞬間、身体をピクリと反応しながらも視線を皇帝陛下に向けると皇帝陛下は青年に満足そうな邪悪で悪魔笑みを浮かべていた。すると青年は次に大臣に視線を向ける。だが、それは皇帝陛下に向けた視線ではなく冷たく、光なき瞳で大臣を睨みつける。だが、

大臣はそんな視線を見て面白そうに「ヌフフ～!!？」と笑みを浮かべる。

そして

「陛下。私めの提案ではありますか：彼に

逆賊討伐の任務を与えてはどうでしようか？」

「む？　それは一体、何故だ。大臣？」

皇帝陛下は意味が分からぬと言つた表情をしながら大臣の言葉に頭を傾げる。

「今まで彼は今迄遠くの国境の守備や革命軍達を一瞬にして殲滅させる程の功績を残したとはいえ守備していく物足りない様です。更に国境線の砦

からここ、帝国までのかなりの長旅ですから身体などがかなり疲れているでしようからねえ?』

大臣はニヤニヤと邪悪な笑みを青年に向けて左手に持っていた大きい骨付き肉をブチブチと肉を噛みちぎりながら他の将軍達がいる中、皇帝陛下に大袈裟な演技をしながら進言して言う。

「うむ、確かに……」

(こいつ……まさか…)

そんな中、大臣のそんな表情を見た青年は一瞬にして理解した。

『こいつは自分を駒として利用する気だと』

(貴方は絶対に私の為に働いてもらいますよ。

ヌフフフヽ…)

と言つてると理解した瞬間、青年はとにかく適当な理由をつけて一分一秒でも早く急いでこの玉座から離れようとする。

「大臣。貴方の気遣いには感謝しますが…」

「うむ、そうだな!!? 大臣の言う通りだ!!?」

「…へ?
へ、陛下……?
一体、何を……?」

青年は低い声で大臣を睨みつけながらも青年は
このまま皇帝陛下に守備していた国境の砦に戻ると
言おうとすると途中で皇帝陛下は無邪気な笑顔で
大臣に頷きながら青年の話を無視して更に話しが

進む。

(不味い…ツ!!? このままでは!!?)

青年は額には一筋の脂汗をたらりと流れて今の大臣と皇帝陛下の会話をどうしたらいいのかと必死になつて思考を巡らせて いるがどうやら手遅れみたいで

「では、其方には帝国の国境の守備沿いの任務は本日を持つて解く!!? そして其方には新たな任務として革命と言つて我が国家に仇なす暗殺集団、逆賊、『ナイトレイド』を一刻も早く殲滅せよ!!?」

將軍達や大臣がいる中、皇帝陛下は大臣の言われるままに玉座から立ち上がりカリスマのある高らかな宣言が響き渡つた。

「ま、待つて下さい!!? 陛下!!? 僕は…」

「おやおや…？ もしかして 貴方は陛下の命令が聞けないのですかなあ？ 逆らうのですか？ それはつまり、貴方は陛下が貴方に向けたお言葉を無下にすると言うのですか？」
陛下に忠誠を誓えないとは…
「おお!!？ とても嘆かわしい事ですぞ!!?」

大臣は持っていた大きな骨付き肉をガブリと勢いよくかぶり付いてボロボロと涙を流して泣いていた。もちろん、その涙は嘘泣きである。そんな大臣の発言を聞いていた他の将軍達がざわざわと周りが騒ぎ始める。

(この肉の塊が…)

青年が大臣に殺意ある瞳で睨みつけるとが大臣は更に嬉しそうに「ヌフフ～～」と笑いだけだつた。

「其方は…其方は余の言葉が聞けないのか…？」

玉座に座つていた皇帝陛下は不安そうな顔をしながら玉座から立ち上がりつて青年の顔を見ていた。すると他の将軍達がざわざわと騒ぎ始める。

（不味いな……）

青年は内心焦つていた。もし、ここで皇帝陛下の機嫌を損なえば間違いなく自分は帝国の反逆者として認識されそこの肉の塊（大臣）が自分の都合のいいように罪をでつち上げられてしまうのを知つていた。故に思考を錯誤するがしかし、いくら

考えてもいい名案は全くもつて浮かばずそんな中、
皇帝陛下は更に不安そうな表情を浮かべているのを見た瞬間、青年は拳をギュッと握つて覚悟を決める。

「…分かりました……陛下のお言葉、ありがたく受け取らせて頂きます。」

「聞きましたか!!? 陛下!!? 陛下のカリスマあるお言葉によつて彼は陛下の素晴らしさに理解したのです!!? 流石は陛下です!!? !!?」

白々しい…………この人の形をした家畜は陛下の前で心にもない戯言をペラペラと並べて……自分が望む結果になるようにワザと言葉巧みに仕向けたくせによく言える……

「おお!!? そうか!!? それでは其方のこれから働いて期待しているぞ!!?」

「了解しました…陛下…」

青年が傳いでいる中、玉座に座つて無邪氣で満面の笑みで笑っていたが少年だがそれでも帝都の皇帝である。相応のカリスマがある。だが、まだ幼いため、大臣であるオネストの指示や助言で政治を行ふ。完全な傀儡というわけではないがオネストに全幅の信頼を置いており、基本的に彼の意見を優先していた。

「では、陛下。僕はこれにて失礼しま…
「待つて下さい」

青年が去ろうと言葉を紡ごうすると自分の言葉を遮る様にある人物が割り込んでくる。そして青年が振り返ると

「どうしたのだ。大臣？」

キヨトンとした表情で陛下は遮つた大臣に質問する。

「実は陛下にお願いがありまして…実は彼と会うのは久しぶりなので出来れば日頃の彼の功績を勞つてあげたいのです!!？」

大臣が最もそうな言葉を並べて皇帝陛下に十八番の嘘八百の演説を大袈裟にする。

「うむ、 そうだな!!? では、 大臣に任せると!!?」

「ヌフフ～お任せ下さい。陛下!!?」

それでは、 私達は一緒に行きましょう。」

「そう、 ですね……それが、 陛下のお望みと
あらば貴方に従いましょう……大臣。」

青年は大臣にそう言つて大臣と共に皇帝陛下がいる
玉座の部屋から出て行つた。

「ど、土竜だああああああ!!」

荷運びをしていた男の声が街道にてこだまする。
男の目の前には、オケラのような巨大な化物。
『一級危険種』 土竜。それが目の前に現れた
のだから。

「こ、こんな街道に土竜が出るなんて

聞いてねえぞ!!?」

「と、とにかく逃げるぞ!!」

もう一人、仕事仲間である男が荷を置いて逃げる
ように言つた。彼らとて自分の命の方が大事で
あろう。

しかし、逃げまどう二人の間に一つの影が映つた。

「人助けと名前売り同時に出来そうだな！」

「お、おい！お前も逃げ——」

「一級危険種土竜……相手に不足はないな……」

男はその影に向かつて叫ぶがもう遅い。

土竜は大きな手をその影に振り下ろした。

だが——

振り下ろした土竜の手は、細切れになつて大量の血を出しながら落ちていつた。その光景を見た荷運びの男達が息を飲んだ。

子供だ。右手に真っ黒な剣を持つた子供が、そこに立つてゐるのだ。土竜は痛さのあまり呻き声を大きく上げるが、すぐさま自分をこのような目に合わせたソレを睨む。

『グオオオオオオ!!』

「怒つたな」

少年がそう言うと残つた手で再び攻撃をする

土竜だが、その影はするりとソレを避け反対の手同様細切れにする。そして、肩に跳躍し土竜の頭を見据えた。

「終わりだ！」

刹那、凄まじい斬撃の嵐が土竜を襲つた。

その影が地面に着地した時には、もうすでに土竜は地に伏せていたのだった。

「まあ、こんなもんか」

「少年!! 淫いじやないか、危険種を一人で！」

男達は、戦闘が終わつたのを見てか木の陰から出てきた。なんともいい笑顔だ。自分たちの生活がかかつてゐる物が帰つてきたのだから、それは

嬉しいはずだ。

「ああ、まあな。一応帝都で一旗上げる気だしな。
これくらいできねえと」

「ツ!! 帝都…か」

少年のその言葉で、男の顔が曇る。

「どうした?」

「少年、君が思っているほど帝都は良い場所ではない。土竜。これなんかよりタチの悪い化物が一杯いるんだ……」

「なんだよ… 街中で危険種でも出るのか?」

「人だよ……人だけど心は化物……そんな連中ばかりなんだ……」

「忠告は有り難いけど今更引き返す訳にも
いかねーよ。俺が……俺達が……帝都で稼いで
村を救うんだ！」

「そうか……これから俺たちも帝都に向かうが
一緒に行くか？助けてもらつた礼も兼ねて」
「お、そりや助かるよおっさん!!?」

すぐにため息を一つ吐く。倒れた馬車を起き
上がらせ男達はそれに乗り込んだ。

「あ、そういう名前聞いてなかつたな」

「ん？俺か？俺は——タツミ。

帝都で有名になる男だからよろしく＝？」

「ヌフフフ…どうですか？

一応、一流のシェフに用意させたのですがお口に
合いましたか？出来れば久しぶりに貴方の作る
料理を食べたいものです。」

「…………」

その後、青年はオネストと共に玉座の部屋を出てオネストと共に食事をしていた。

オネストは肉の塊や干し肉などをガツガツと食べて話しをするが青年は焼き魚を箸で少しづつと食べて一向に話そうとすらしていなかつた。

「やれやれ…だんまりですか……」

オネストはそう言うが青年を面白い物でも見る様に「ヌフフ」と邪悪笑みを浮かべていた。

「まあ、貴方は元々、あまり口数が少ない人でしたからねえ…【ガチヤン!!?】」

大臣が話していると青年は虚ろな瞳でオネストを睨みつけて箸を皿の上の近くに力強く置いていた。

「さつきからベラベラと御託はいい…さっさと要件を言え。無いのならば帰させてもらうぞ…」

青年は席を立つてその場から立ち去ろうとするとオネストはニヤニヤと邪悪な笑みを青年に向ける。

「酷いですねえ…私としては久々に貴方の顔を見たかつたって言うのは本当だつたのですよ?」

「ふん、白々しい…はつきりと言つたらどうだ?

僕を『自分の駒として利用してやる』って、そして
何故、国境の砦から帝都に呼び戻し任務の任を
解た? 返答次第では……』

「おおゝ恐ろしいですね!!? 怖いですね!!?」
流石は『狂刃の…【ヒュン!!?】

グサツ!!?

オネストが青年と話していると青年は大臣にナイフ
を投げつけて壁に刺さっていた。そして青年の逆鱗
に触れたのか青年は大臣を睨みつける。

「…大臣…そんなに死にたいって言うなら

お望み通り今すぐ挽肉にしてやるぞ……』

青年が大臣に向かっている瞳はまさに『憎悪』。まるで敵として見るような瞳を向けていた。

「ヌフフ、そんなに睨んで殺意を周りに広げないでくださいよ？　他の者がとても怯えて息すらも出来てないみたいでしーい？」

オネストからそう言われて青年は気が付いたのか
料理長や料理人、更にはメイド達などが青年の殺意
に当たられて息すら出来ずに「はあ、はあ……」と
苦しそうに膝をついて悶えていた。

「…そうだな……」

青年がそう言うと先程の恐ろしい殺意は消えて安堵する者や倒れる者、更には泣いて怯える者達がいた。

「私が貴方を呼んだのはただ一つ、最近、巷で有名な『ナイトレイド』という目障りで邪魔な害虫共を討伐してほしいのですよ」

オネストはそう言つてナップキンを使つて口元を拭いて邪惡な笑みを青年に向けて浮かべる。

「だつたら、他の将軍（ドS将軍）や暗殺部隊、

もしくはあんたの周りで媚びていた無能な腰巾着の貴族共に頼めばいいだろう。あいつなら嬉々としてやるだろう?」

青年は溜息つきながらオネストに言うがオネストは溜息をついて困った表情で

「私もそうしようと思ったのですが殆どの無能な腰巾着共はほんの数日でナイトレイドに殺されてしまつたのですよ。それに頼みの綱の『彼女』は今、北の異民族討伐に向かつていて戻すのは無理なんですよ。そして最近では、周りに群がる将軍達も最近の革命軍の勢いにビビつて亡命する者すら増えてきて信用出来ないんですよ。なので貴方を国境近くの砦から帝都に呼び戻した訳なのですよ」

「なるほど……だからあのドＳ将軍が北の異民族を討伐して帝都に戻つて来るまで僕が繋げつてか？僕があんたの指示に「はいそうですか」と簡単に従うと思うか？ だとしたら残念だつたな……僕はあんたの指示は受けないし、駒になつて言いなりになる気もないし、更にはメリットすらない。」

やはりか……時間を無駄にした。と言わんばかりに興味のなくなつた表情をして二度目の溜息をついて光なき瞳の視線をオネストに向けて

「じゃあな、オネスト。他を当たれ……」

「……ヌフ、ヌフフフ……!!?」

「…何がおかしい……？　ついに気でも狂つたか？」

青年はオネストにそう言つて早歩きで扉の前のドアノブに手をつけて回そうとすると青年の背後から「貴方にメリットですか？　そうですねえ：メリットならありますよ？」と人を不愉快させるオネスト声と笑いが微かに聞こえてくる。

『彼女が動いていると言つてもですか？』

「ツ!!.?」

青年がオネストの言葉を聞いた瞬間、ピクリと

僅かだが体が反応する。

「なん、だと……？」

そして青年はオネストの一言で少し驚いた表情を浮かべていた。

「ヌフフ～やつぱり、勿体ぶつて正解でしたねえ。

どうです？　『誰よりも貴方を最も尊敬し最も死ぬほど憎んでやまなかつたあの彼女』がですよ。
どうです？　とても面白いと思いませんか？』

オネストはそう言つて狂氣染みた笑顔と涎をダラダラでと流して青年に聞くが青年はつまらないと言つた興味無さそうな表情をして

「ふん、そんな事どうでもいい…」

「おや？ それはどういう事ですか？」

オネストは少し驚いていた。青年に『彼女』の話になると彼は怒りを露わにすると思っていたのにそれどころか興味なさそうな表情でただ一言、『どうでもいい…』と切り捨てたのだ。故にオネストは彼に興味を引かれた。

「あいつと僕の見ている世界感が違つた。ただ、それだけのことだ。それにあいつは僕の獲物だ…：必ず、僕が殺すと決めている。それにあいつを『復讐者』にする為だけに今まで育てて更には

『あの事件』を起こしたのだからな……』

「おお!!? 惨いですね。ですが、その言葉からするに
それはつまり……」

「あんたに従うのは癪だが、ナイトレイド討伐の
指示だけは従つてやる。」

「ヌフフ…では、よろしくお願ひしますよ。
『カイドウ隊長』?」

「ふん、頼まれる筋合いはない……それで、
要件はそれだけか? では、失礼する。」

カイドウと呼ばれた青年はドアノブを回して扉を開ける。

「あ、そうだ……一つ言い忘れてた。」

「おや？ 何ですかな？」

オネストは笑いながら言つた瞬間、

「ぎ、ぎやああああああああ!!?」

「痛い!!? 痛い!!? 痛い――!!?」

オネストはいきなり叫び始めた。何故ならオネストの頬には深い傷口が出来ていて赤い水滴がポタポタと地面上に流れ落ちる音がした。

それは血だつた。先程、投げたナイフが気付かないうちにオネストの頬に当たつていたのだ。

「大臣。貴様の趣味にとやかく言うつもりはない。

だが、人の神経を逆撫でしたりする相手はちゃんと選んだ方がいいぞ。　良いな？」

カイドウはオネストにそう言つて長テーブルの上にあつたフォークとオネストの目の前にある干し肉の料理にぐしやりと鈍い音を立て突き刺してそれを見たオネストは「分かつた。分かりました!!?」と真っ青にして鼻水を垂らしながら泣き叫びながら

許しを請うとカイドウは哀れと思つたのか

「今回はこれくらいにしてやる。

次は無いと思え……」

カイドウはオネストにそう一言を言つた後、
オネストがいる部屋を後にした。

「は、ははは…私とした事が判断間違うとは……

次はほどほどにした方が良いかもしませんね…
でないと、私が彼に本当に惨たらしく殺されて
しまうかもしません……」

オネストは苦笑いしながらそう呟いた後、先程、カイドウがフォークで目の前で突き刺したが肉の塊の料理を食べる気になれなかつた。

「おお!!」

圧巻した。感動と言つても良いほどだろう。
それほどまでに、俺は帝都に心を奪われた。

「ここが帝都かあ、ここで出世すれば村なんて
買えるかもな」

タツミの目的はただ一つ。ここ帝都で出世し、
自分の村を救うということだった。実はもう二人
ほど連れがいたのだが、事情から村を出るのが
俺の方が遅かつたのだ。一応あちらも目的地は
帝都だから、会えれば良いんだが…

「ここ広いしなあ。ま、イエヤスもサヨも強いし
大丈夫だろう!とにかく兵舎を探すか!!」

心を躍らせながら、タツミは人が集まる道を進んでいった。そのタツミの言葉に耳を澄ませる人間がいると気づかぬままに——

タツミが兵舎向かうと帝国の兵隊希望のゴロツキ達が兵舎に集まっていた。

「ア——お前も入隊希望者か：んじや、
この書類書いて俺ん所持つてきな」

「……」れつて一兵卒からスタートつてこと?」

タツミは納得出来ずに受け付けの柄の悪い男に質問する。

「当然だろ？　しかも大抵辺境行きだ」

「そんなのんびりやつてられるか!!.?　俺の腕を
見てくれ！使えそうなら隊長クラス辺りから士官
させてくれよ!!.?」

タツミがそう言うと気付いた時には兵舎から
追い出された。

「なんだよ試すぐらいいいだろ!!.?」

「ふざけんな！　兵士になるのすら抽選が必要
なんだ!!.?　この不況で希望者が殺到してんだよ!!.?」
いちいち見てられつか！雇える数にも限界が
あるんだよ!!.?」

「え…そ…うな…の…?」

「分かったらどつか行けクソガキ!!?」

受け付けの男はタツミに怒鳴り散らして兵舎の扉をバタンと音を立てて閉める。

(だつたら騒ぎを起こして名を売るか?
でも捕まるかもしんねーし…)

タツミは地面に足組しながら考えていた。

すると

「ハーア。お困りの様だな少年、お姉さんが力を貸してやろうか？」

(これが帝都か…!!?)

タツミはそう言つて金髪の女性の胸を見て心の中で呟いていた。

そして時間が飛ぶが夜、タツミは一人道を歩いていた。

どうしてかだつて？簡単に言うと騙された。

騒いで兵舎を追い出された後、通りかかった金髪の美人なおっぱいのお姉さんに「隊長にしてもらうように頼んでやる」と言われ、そのワイロで金を全部渡してしまつたのだ。すれば後は簡単。現在このように無一文に早変わりだ。

(あつんのクソおっぱい!!)

次あつたらアレむしり取つてやる!!)

男性らしからぬ最低な考えを持つていた

タツミであつた。しかし本当にどうしたものか、このままじや餓死する。サヨにもイエヤスにもあつてねえつてのに——

「はあ、前途多難すぎるだろ俺」

タツミがつかりしていると

「どうされたのですか？」

声が掛かつた。

大人しく優しそうな口調で尋ねる金髪の少女。
品のある服装と兵士を連れていることから
上流階級の者であろう。

タツミは躊躇いがちに泊まる宿がないことを
伝える。

すると、

「では、是非私の家にお泊まり下さい！」

少女は嬉しいそうにそう返した。

その提案に申し訳なく思い断ろうとするも、
少女は「是非是非」と引く様子はない。じゃあ
それなら、と遠慮がちに少女の招待を受けることに
した。

次の日——

「なあ、おっさん」

「おっさんというなお兄さんと呼ベガキ」

「ガキって言うな。いやそんな事より…」

「お嬢様!!お待ちを!!」

「お嬢様少し抑えて!!?」

「あれってなんの修行だ?」

青く晴れ晴れとした天気。現在、アリアの付き添い
という事で屋敷の兵と共に街へ繰り出していた。
いや、そこは問題じやない。問題はその量だ。
俺は背後に積まれた荷物の山を指差す。

「これおっさん達の給料の何ヶ月分
くらいですか?」

「言うな。むなしくなる」

横で目を閉じる兵の一人である男、俺命名
おっさん。おっさんが言うには女というものは
誰しもあんな感じらしい。サヨなんかはすぐに
決めていたので、この光景が不思議だ。

「にしても本当よく買いますねアリアさんは」

「まあな……お嬢様にも事情はあるんだろうよ」

事情？

「んな事より上見てみろ」

「上？」

おっさんに言われ、俺は上を向く。すると
気づかなかつたが、そこには大きな宮殿が
そびえ立つていた。

「デケエ!?」

「あれがこの国を仕切る皇帝のいるところだ。

：いや、違うな。今の皇帝は子供だ。本当に
この帝都を支配しているのは——大臣。
それがこの国を腐らせる元凶だ」

「ツ!!じやあ、俺の村が重税で

苦しんでいるのも……」

「帝都じや常識だな……それにあんな連中もいる」

「ナイトレイド？」

そう言つて、おっさんは後ろにあつた顔つきの張り紙を指差した。そこには『ナイトレイド』とそう書かれた手配書があつた。

「この帝都を震え上がらせる殺し屋集団だ。

名前の通り、ターゲットに夜襲を仕掛けて始末する。主に富豪や重役をターゲットにしている。だから、用心だけはしておけ」

「はい、もしもの時はアリアさんを連れてでも逃げます」

「あら、なんの話？」

すると、アリアがひと段落入れたのかこちらに戻ってきた。背後には兵達が更に多荷物を持たされている。更にアリア達は次なる店へと向かっている。タツミは前方が見えない程の包みを抱えてひい、ひい、と疲労を隠せない。

その夜――

コツコツと静かな廊下に足音が響く。

「ふふつ、やつぱり日記をつけるのは
やめられないわね」

アリアの母は、そう言いながら手に持っていた
小さな日記帳を眺める。

コツコツ、コツコツその音だけが響く。
しかし次の瞬間だつた。

「え？」

ジャキンツと、まるで金属を擦り合わせたような
音が鳴つた。

その音の正体は、ハサミ。巨大なハサミ。

そして、それで切つたものは——自分自身だつた。

「すいせん」

血が綺麗な廊下に飛び散る中、一人の女性がそう言つたのだつた。

「ぐ……う……た……助けて……娘が……娘がいるんだ!!?」

アリアの父が自分の首を絞め殺そうとする
金髪の女性に命乞いをする。

「安心しろ、すぐ向こうで会える。」

だが、そんな命乞いを許さないと首を絞める手の力を更に強くする。

「娘まで…情けはないのか!!?」

「情け…?
意味不明だな」

アリアの父は金髪の女性にそう訴えるが金髪の女性はアリアの父の言葉を鼻で笑つてそう言つた後、「ゴキン」と音を鳴らしてアリアの父の首をへし折つた。

そしてその夜。何者かの殺気に気づいたタツミはベットから飛び起きた。

「なんだ…殺氣!!?」

その時、タツミの脳裏に浮かんだのは昼間警備兵の男との話が思い出されていた

「帝都を震え上がらせている殺し屋集団だ…帝都の重役達や富裕層の人間が命を狙われている」

その時、外の様子を確認するため窓の外を確認した時彼等はいた。

満月を背にして、彼等は標的の屋敷を見下ろすようにいた。

ナイトレイドの襲撃である。

「富裕層だからつてここも狙うのかよ!?」

屋敷の異常に気づいた警備兵はすでに行動を起こしていた。突如襲来したナイトレイドへの迎撃に向かうため屋敷の警備兵の中では、タツミが強いと一目見ただけで分かつた腕利きの3人が向かつていった。

「俺はどうする!?」加勢に行くか・護衛に行くか

タツミは考える間も無く、すぐに護衛に行動を移した。何故なら迎撃に向かった屋敷の警備兵3人が瞬く間にナイトレイドに殺されてしまつたからである。彼が護衛に行く決意をしたのはせめて恩人であるアリアだけでも助けねばという考え方からであつた。

〈せめて、せめてアリアさんを守らないと！〉

屋敷の裏口の道を最短ルートで探していた

タツミであったが、屋敷が広かつたため時間が掛かりはしたもの運良くアリアとその護衛を務めていた者に合流できた。

だが、そこでアリアの護衛を務めていた警備兵の

男から異常を察知した帝都の警備兵が来るまでの間ナイトレイドの連中を食い止めてくれと頼まればし崩し的に引き受ける形になってしまったタツミ。そこに迫ってきたナイトレイドの追っ手である少女とあわや戦闘となるかと思われるも、少女はタツミを無視して護衛とアリアに向かつていた。護衛の警備兵が手にしていたマシンガンで少女に発砲するも、少女の斬撃の方が圧倒的に速く一足にて必殺の間合いに入ると一閃すると護衛の警備兵は上半身と下半身が泣き別れして絶命してしまった。

「ヒイツ」

目の前で人が真つ二つにされた光景を見てしまい腰がぬけてしまったアリア目の前には、そんな惨殺死体を作り出した暗殺者がいた。

「待ちやがれ！」

アリアを守るためにタツミが少女に斬りかかる

「お前は標的ではない、斬る必要はない」

尚も表情を変えずに少女は淡々とう

「でも」の娘は斬るつもりなんだろ「

「うん」

「うん!?:?」

「邪魔すると斬るが?」

殺氣は感じられないが警告をするようにタツミに

聞いてくる

「だからつて逃げられるか！」

タツミが覚悟を決めて、叫ぶ

「そうか、では葬る」

瞬間、少女の殺気が倍増されビリビリとタツミの肌に突き刺さる。

明確に相手の少女はこちらの事を殺すと言った。今まで感じたことのない殺気に気圧されるタツミであるがアリアを守ると決めた以上絶対に負けるわけにはいかなかつた。

(少なくとも、今の俺に勝てる相手じゃない。
けど、そんなこと気にしてられない！)

(そもそも女の子一人救えない奴が村を
救えるわけがない！)

その瞬間同時に飛び出していく二人。

最初の一撃を受け止め、お互い鍔迫り合いに
もたれるも、タツミはすぐに剣を振り上げ少女に
一太刀を浴びせようとする。それを軽い身のこなし
で上にジャンプして回避する少女は続けてタツミに
蹴り技を与える。

(ま、まずい！)

蹴り技によつてダメージを受けたのではなく、
体制を崩されたことでタツミが無防備な状態になつてしまつた。

そこへアカメの突きが繰り出された。

ザシユ

アカメの帝具村雨の一撃を食らつてしまい力なく
倒れるタツミだが、まだ息はあり多少突きの衝撃
は残つていたもののダメージは無かつたタツミ

(来い、油断してこつちに来やがれ)

「…」

（先程の刀の感触は、人体ではなかつた

この男油断できない』

「へ、油断して近づいてもこないのかよ」

「手応えが人体ではなかつた」

タツミが胸元のシャツから取り出したのは木彫りの人形のようなもので、誇らしげにかけながら

「村の連中が守つてくれたのさ」

「葬る」

「ちよつと待つて。お前ら金目当てかなんだろ

この娘は見逃してやれよ。戦場でもないのに罪もない女の子を殺す気か！」

タツミがアカメにそう言うが

(ダメだ、コイツ全く話を聞いてねえ!)

そして少女の刀がタツミを斬ろうとし、
タツミが死を覚悟した瞬間

「待った」

少女の後ろから別の人物が現れ少女を引っ張った

「何をする」

「まだ時間はあるだろ、この少年には借りがあるんだ返してやろうと思ってな。」

タツミには嫌でもその人物に見覚えがあつた。

「あんた、あの時のおっぱ！」

その人物はタツミが最初に帝都に訪れた時に金を騙し取り、野宿をする羽目になつた原因である
レオーネだつた

「そうだよ美人のお姉さんだ」

レオーネはタツミに笑顔を向けウインクして
みせそついた

「少年、お前罪もない女の子を殺すなといつたが
これを見てもそんなことが言えるかな」

レオーネが屋敷の倉庫の前に立つと凄まじい動物の脚力でそれを蹴破つた

「見てみろ、これが帝都の闇だ」

倉庫の中にあつたのは夥しい数の凄惨な死体で溢れていた。

手足がちぎれているもの、目玉がないもの、凄まじい数の拷問器具にはどれも元の色が分からぬほどに血で染まっていた。全員が苦悶の表情を浮かべており、想像を絶するものであつたことが窺いしれる。

「な、なんだよコレ…」

「地方から来た身元不明の者達を甘い言葉で誘い込み己の趣味である拷問にかけて死ぬまで弄ぶ。それがこの家の人の本性だ。」

そんな隙を突き、アリアが静かに逃げ出そうとするのをレオーネは見逃さずすぐにアリアを捕まえた。今のレオーネの表情は先程とは違い殺し屋の顔に戻っていた

「この家の人がやつたのか」

「そうだ、護衛達も黙っていたので同罪だ」

「う、嘘よ!!? 私はこんな場所があるなんて

知らなかつたわ!!? タツミは助けた私とコイツら
とどつちを信じるのよ!!?」

ナイトレイドの下調べで既にアリアが関わっていた
ことはわかつていただがまだ嘘をつこうとする様子に
レオーネは蔑みの眼差しを向ける。

そんな時、倉庫の檻から声が聞こえてきた。

「タ、タツミだろ、俺だ」

「イエヤス!!?」

そこにいたのはバナナが特徴的な村の

ムードメーカー的な存在であつたイエヤスが居た。

今のイエヤスは身体中に斑点模様があり誰が見ても
異常があるのは明らかであった。

「俺とサヨはその女に声を掛けられて、

飯を食つたら意識が遠くなつて気がついたらここにいたんだ。その女がサヨをいじめ殺しやがつた」

アリアを睨みながら言うイエヤスの表情は親友の命を奪つた者に向けられる憤怒の形相であつた。

「何が悪いって言うのよ!!？」お前達は何の役にも

立てない地方の田舎者でしょ！家畜と同じ、それをどう扱おうが私の勝手じやない!!？だいたい、その女家畜のくせに髪がサラサラで生意気すぎ、私が

こんなにクセツ毛で悩んでるのに、だから念入りに責めてあげたのよむしろこんなに目を掛けて貰つて感謝すべきだわ!!」

タツミの目の前で自分の罪状をまくし立てるアリアの表情は醜悪そのものであつた

「最後に一つ聞きたい、サヨはサヨは何処だ」

そう倉庫の中のどこにもサヨはいなかつたのだ、タツミはアリアが自らの罪状を言つていた後半あたりから何も聞いていなかつた。もうすでにタツミはアリアを殺すことに決心がついていた。

「知らないわよ、そんなの。それより私に恩を感じてるならはやくコイツらを殺しなさい！」

「善人の皮を被つたサド家族か邪魔して
悪かつたなアカメ」

「葬る」

「待て」

「まさか、またかばう氣か?」

「いや、俺が斬る」

タツミは憤怒の表情でアリアを斬り伏せた。
その瞬間、アリア「あ」と小声で言つた後、
その場に倒れた。

レオーネは「ふうん…」呟いてタツミを見ていた。

（憎い相手とはいえ躊躇わざ斬り殺したか…）

レオーネが感心していると

「へへ…さすがはタツミ…スカツとしたぜ…ゴフツ」

「！　どうしたイエヤス！」

イエヤスの容体がおかしくなったのに気付いたタツミは急いでイエヤスの元へ向かう。そしてイエヤスの体を持ち上げて声を掛けるがアカメがやつて来て

「ルボラ病の末期だ……この夫人は人間を薬付けにしてその様子を日記に書いて楽しむ趣向があつた：ソイツはもう助からない」

助からない…？　誰が？　イエヤスが？
どうして？　嘘だろ？

タツミがそう考えていると

「…タツミ」

と小声だつたがいつも聴き慣れているイエヤスの声が聞こえた。そしてイエヤスは更に話しき続ける。

「サヨはさあ…あのクソ女に最後まで
屈さなかつた…カツコ良かつたぜ…」

やめろ…やめてくれ!!? そんな最後の別れ
みたいな言葉を言わないでくれ!!?

「だからこのイエヤス様も最後は…カツコ良くな…」

イエヤスはタツミにそう言うと一言も
発さなくなつた。

「もう氣力だけでもつてる状態だつたな…」

アカメがタツミに一言、言うが今の

タツミには全く聞こえておらずただ一言、

「……どうなつてんだよ帝都は…」

タツミはそう呟いた後、イエヤスの遺体を抱きしめて涙を流した。

「えつと… アカメでいいのか？」

「ああ、なんだ」

「さつきはすまなかつた。

事情を知らなかつたとはいえ攻撃してしまつて」

俺はアカメに向かつて頭を下げる。女性の腹を蹴り、地面に叩きつけたのだ。それ相応の事をされても文句は言わまい。しかし、その返事は予想していなないものだつた。

「なら、仲間になれ」

「……へ？」

「おおーアカメ、ナイスアイデア!! 確かに
かなり…いや、とてもなく強かつたよな少年」

「は？・ちよ……」

なんだ、勝手に話が進んでいつてるぞ！？

「んじゃ、とりあえず運ぼうか。

私はこの少年運ぶから」

「うん」

「お、おい離せ！？」

「大丈夫だ。後で死体は私が持つて行くから」

だが、そんな申し出も受ける事なく俺は他の仲間がいるところへと連れて行かれる筈だった。

「おいおい…そんなつれない事を言うなよ？」

せつかく偶然とはいえ、会えたんだからもう少し
付き合つてもらおうか。そこの『暗殺を革命や正義
と称して掲げている』巷で有名な暗殺集団の
ナイトレイドさん?』

「誰だ!!?」

レオーネは叫ぶが姿は見えない。だが、アカメは
その声に聞き覚えがある。

『絶対に忘れてはいけないあの人の声。』

アカメは一步、また一步と歩き始めてそして
徐々に走り始める。

「おい!!? 戻つてこい!!? アカメ!!? アカメーー!!?」

レオーネが叫ぶ様にアカメを呼ぶがアカメには
全く届いておらず、更には腰あつた愛刀の村雨を
何の躊躇いなく抜刀している。

(この声といい・この様な戦法をするのは

間違いなくあの人しかいない!!?)

アカメは村雨を構えて何のためらいもなく
振りかざした。その瞬間、暗闇の中、金属が
【ガチン!!?】とぶつかり合う音がして火花が
散つた。

そして漆黒の刀を持った『ある人物』の姿が

あつた。

『久しぶりだな…アカメ?』

「カイドウ――――!!?!!?」

カイドウは無表情で冷たい声でアカメの名前を呼ぶとアカメは殺意と憎悪が混ざったような瞳をカイドウに向けて睨みつけながらカイドウの名前を叫び再び火花が散りながらもお互いの刀の刃がぶつかり合つた。

悪鬼なる者と無力なる現実

「だ、誰か……」

薄暗く消毒液などの薬品などが蔓延して更には
様々な場所に血溜まりや飛び散った血が壁や天井
などあり狭い部屋で聞こえるか分からぬいような
今にも掠れそうな声で

「たす……助け……」

誰もいるはずのない部屋に誰かに助けを求める
ように血が付着して天井を見上げて縋るよう
に虚な瞳で手を伸ばしていた。

そんな時、

「助けてほしい？」

「えつ……？」

助けを求める子供の前に現れた人物は子供に一言聞く。その言葉が予想外だつたのか驚いた表情をしていた。

「どうする？ それとも、このまま薄暗い部屋に居たいのか？」

「そ、それは……」

目の前の人物は『自分のことは自分で決める』と言われている気がした。

「わ、私は……」

「ぐつ……ツ!!?」

苦しそうな声を上げた人物は膝を地につけて
ドクドク…ととても痛々しい血塗れの右肩を
押さえていた。更には血塗れ右肩から一筋の血液が
ダラダラと流れて右手に握っていた刀にも着いて刃
にまで滴り落ちている中、視線を目の前に向けて

『目の前にいる人物』に向けて『憎悪が宿つた瞳』で睨みつけていた。

弱い……

『この程度か：程度なのか？　お前の僕に対する憎しみは、絶望は、嘆きは、苦しみは、怒りはそして——』

だが、苦しそうな声を上げた人物の前立つている人物は対しことはないと言つたように涼しい顔をしながらも残念そうな声で言いながら漆黒の刀をくるりと綺麗な円を描くように一回転させて鞘に収納して懷から漆黒のナイフを取り出してギュと握つて一步、また一步とコツコツと音を立てて歩いてゆっくりと近づいてきてアカメに向けて

容赦なく振りかざしくる。

「ぐつ!!?」

弱過ぎる……

苦しそうな声を上げた人物の身体はもう満身創痍の状態のせいなのか攻撃を受けるのもやつとの状態であるのか傷口から血がボタボタと流れ、あ目の前の人物はそれを見逃さなかつたのか一旦、距離を離し闇夜に紛れながらも懐から更に漆黒のナイフを三、四本投擲してそして夜の暗闇を利用して足音を消して暗闇の中を移動している中、そして刀で投擲したナイフが全部弾かれたのを確認した後、目の前まで移動しており上げて苦しそうな声を出した人物の首筋へと無理矢理押し込んでいく

そして——

『憎悪や復讐心が宿つた心と刃はこの程度なのか？
それとも取るに足らない事だつたのか？』

『なあ、アカメ…？』

これは、とてもじやないが…弱すぎて全然、
話しにならない…むしろ勝負以前の話だ……

今のお前に刀では大人気ないようだな……
それどころか今のお前にはナイフだけで充分だ…

「カイドウ…!!? カイドウウウウウウウウ!!?」

アカメはカイドウの名前を呼びながら愛刀村雨を構えて憎む相手カイドウ目掛けて走りながら切り掛けっていく。

「葬る!!?」

そう言つて頬を狙つた突きをする。
だが、カイドウは漆黒のナイフで村雨の軌道を僅かにずらしていく。

「葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!? 葬る!!?」

アカメは更に刀の斬撃を増やすがカイドウは
左右交互にアカメの刀の斬撃をナイフなどで
容易くいなしていく

嗚呼、やつぱり……やつぱりだ……

その時カイドウは『ある一つの確信』を得ていた。

それは——

ガツカリだ……ガツカリだよ、アカメ……

それは『前よりも弱くなつていてる』

お前は……お前は前よりも弱くなつていてる。

「葬——」「馬鹿の一つ覚えみたいに吠えるな」

「がつ!!?」

アカメ斬撃を繰り出そうと村雨を振り下ろした
瞬間、カイドウは漆黒のナイフで村雨の刃を
滑らせて軌道をずらした後、アカメの腹部に
思いつき力を入れる。

「ぐつ……うつ……」

そしてアリアが住んでいたであろう屋敷の壁に打ち付けたせいか立てずにいた。

「おい!!? これ、まずいんじゃないのか!!?」

「確かに……これは本当にやばいなあ……」

タツミが慌てながらもレオーネに言う。

レオーネも額に一筋の汗を流しながらも内心焦っていた。

(まさか…あのアカメが何も出来ずにここまで
追い詰められるなんて……)

アカメはナイトレイドの中ではかなりの強者だ。
だが、あのカイドウという青年はそのアカメの
彼女の攻撃をあの剣捌きを軽々と捌き、そして
あそこまで追い詰めている……

「いいか…タツミ、何があつても絶対に

動いちやダメだからな…」

「ね、姉さんは……？」

タツミは心配そうに恐る恐るレオーネに
聞くとレオーネは苦笑いの表情になつて

「アカメの援護に行つてくるよ。

それに…今のアカメはほつとけないからな……」

「とにかく、何があつても動くなよ…」とタツミに二度念を押す言葉を言つた後、レオーネはアカメとカイドウと呼ばれた青年がいる所へと向かつて行つた。

「何故だ：何故お前はそんなにも脆弱に……

『脆い鈍のような刃』になつてしまつたんだ…」

一步、アカメの前に近づく

「なにがお前を弱くさせてる？ なにがお前を縛り
続いている？ なにがお前をそこまで愚かになつて
更には堕落させ子供のように見苦しく縋り付く？」

もう一步、近づく

するともう目の前には座り込んでしまい
立てなくなつたアカメの前にいた。

そしてナイフの鋒を『アカメの左目のギリギリ』
に躊躇いなど一切なく向けていた。

「それとも——」

カイドウはそう言うとアカメに向いていたナイフを

背後に投擲して更に鞘に収納していた漆黒の刀をいきなり抜刀をして背後も見ずに振り返つて刀を縦へと振りかざした。

「ぐつ…!!？」あがつ…!!？」

すると背後からとても痛々しそうな声が聞こえてきた。

「こいつのせいいか？」

「レオーネ!!？」

「大丈夫だ!!？」問題ない!!？」

アカメは叫んだ。何故ならレオーネの太腿にはカイドウが先程投げた漆黒のナイフ一本が痛々しい

ぐらいに深々と刺さつていていたからだ。

(この程度の傷口どうということはない……)

レオーネは太腿に深々と刺さつているナイフを引き抜いて捨てた後、ゆっくりと立ち上がるろうとするがフラフラな状態で立ち上がるろうとするがその姿を見ているカイドウは溜息をついて

「それを見て本当に大丈夫なら、な…」

べちやりーー

カイドウがそう言つた瞬間、べちやりととても生々しい音が右から聞こえてきた。

そしてレオーネは『ある違和感に気付いた。』

(えつ……?)

それは——

『右腕が……右腕が、ない……?』

(う、嘘、だろ……ツ!!?)

気がつけばレオーネはカイドウの漆黒の刀に斬られていた。そしてその斬られた刀傷の痛みや違和感などは全く感じなかつた。しかしその感じた痛みは肩から下まで斬られた傷口であつて右腕の痛みはカイドウに言われるまでは全くもつて気が付かなかつた。

「う、うががああああああああああああ!!?」

レオーネは右腕を切断されたのを理解した瞬間、右腕の激痛がレオーネを襲う。尋常じやない激痛どころか切断された右腕から大量の血液がポタポタと音を立てる中、レオーネはとても苦しそうに苦痛に満ちた表情をして膝を地に付けて悲鳴を上げてその場で蹲つていた。

そうレオーネの右腕、正確には右腕の関節辺りが綺麗に切り取られたその切断された右腕からはポタポタと大量の血が滴り落ちてレオーネの足元の周囲は小さくはあるが血の水溜りが出来ていた。

「もういい!!? 私を置いてタツミを連れて一緒に逃げろ!!?」

「レオーネ!!?」

アカメがレオーネにそう叫ぶがレオーネは逃げる気配が全くない。

「い、嫌だね……仲間を見殺しにして自分だけのうのうと生きろなんて死んでも嫌だね：ツ!!？」

レオーネは右腕を押さえながらアカメの前に立つてアカメを庇うように戦闘態勢に入つていた。

「そ、うか……だつたら——」

するとカイドウはレオーネにそう言つた瞬間、

「……で尻を晒して死ね」

そう言つた後、カイドウは視線をアカメに移して

『そうすればアカメがもう一度『復讐者』に戻り前よりも更に刃は憎しみが込められ鋭い殺意の刃になる筈だ。』

「——ツ!!?」

カイドウはそう言つた後、一瞬にしてレオーネの間合い入り込んで刃をレオーネの首元に当てようと下から振り上げる。

「くつ!!?」

だが、間一髪だったからかカイドウの刀が振り上げるられる瞬間、刃とレオーネの顔がギリギリになるぐらいの紙一重でなんとか斬撃を避ける。

「ほう……避けたか……」

「ふん、当たり前だろ……お前が思つてはいるほど
私はヤワじやないからな……」

自分の振るつた刀の刃で右腕を切り落とされた重症の状態でありながらも紙一重で避けて此方を睨みつけ怒りや憎しみなど殺意の宿つた瞳の視線を向ける人物——レオーネに少し興味を持つていた。

「そうか……じゃあ、これならどうだ?」

カイドウはレオーネの不意を突いて刀の鞘でレオーネの溝に思いつきり打ち込む。

「ぐつ……あ、あがつ!!?」

するとレオーネは躊躇ながらもカイドウから

ゆっくりと距離を取りながらも苦しそうな顔をしながらも殴られた胸元を押さえていた。

「さて、どうする…アカメ？　早くしないと

この女を微塵切りにして殺してーー【ガチン!!?】

苦しそうな表情をしていたレオーネの元に近づいていたカイドウはレオーネを蹴り倒して切断された右腕を足蹴にしてレオーネを首筋に冷たい刃を当ててアカメに聞こうとした瞬間、カイドウの首筋辺りに鉄と鉄がぶつかり合う金属の鈍い音が聞こえた。

「あ、アカメ…?」

レオーネはアカメに声を掛ける。

しかし、レオーネはあることに気が付いた。

それは目の前にいるアカメの姿はとてもない
雰囲気と気配を感じたからだ。

「カイドウ……」

「なんだ？」

アカメは顔を俯かせたまま傷だらけのフラフラな状態の身体であつたが必死になつてなんとかして立ち上がつた。

「貴様にとつて『私の存在』はなんだ……」

そしてアカメがカイドウにそう質問すると

「なんだ、そんなことか？」

カイドウは溜息を吐きながら光がない冷たい瞳をアカメに向ける。

『僕にとつてお前という存在は『器』だ』

「器だと…？」

カイドウのその『器』という言葉を聞いた瞬間、アカメの肩がピクリとさせて反応する。

「そうだ、お前を…『お前達』を拾ったのは僕が頂きへと至る為に必要な器だと思つたからあの時『君達』を助けんだよ？」

そうカイドウは言うとケラケラとアカメを嘲笑う様に笑つた。

「この、クズ野郎が…ツ!!?」

レオーネは苦しそうな表情をしながらもカイドウを睨みつけて顔を真っ赤にさせていた。

「…………」

カイドウは視線をレオーネに向けて漆黒の刀の刃をレオーネの横腹を突き刺す。

「が、がはつ…ツ!!?」

「レオーネ!!?」

「うるさい。それに君は僕をクズだと言ったけど君達も『正義』や『平和』のためにって言つてるけど『同じクズという名の同類』だと思うけど?」

カイドウはそう言つた後、レオーネを突き刺した
漆黒の刀を引き抜いて視線をアカメに向ける。

「しかも何も疑わず純粋な笑顔を僕に向けるあの時
のアカメ姿を見ていて本当に滑稽だつたよ」

その笑う顔はまるで——

『まあ、そのせいでお前の——「黙れ!!?』

『悪魔のような笑みだった』

まさに邪悪、光を映さない漆黒ような瞳と口元は三日月のように口角を上げて不気味な笑みを作りながらアカメを見ている。

「もう良い……貴様は——」

アカメはそう言つた後、アカメは俯いた顔を上げた。

「今すぐここで葬つてやる（殺してやる）……ッ!!?」

私は何処かで彼を信じていたのだろうと……だが、駄目だ：目の前の奴（悪鬼）をこの手で切り刻み息の根を止めなければこの身の憎悪が、憤りが収まらない。それどころかあの悪鬼を最後まで信じた愚かな自分自身に憤りを感じてしまい正気を保つ理性が焼き切れてしまう……

今のアカメのその瞳には今までない程の『殺意』を向けながら村雨を構えて刃をカイドウに向けて

「カイドウウウウウウウ!!?」

アカメはカイドウの名前を叫びながら村雨をカイドウに向けて振り下ろした。

だが、

「はあ…やつと殺す気なつててくれたか……
だがーー」

カイドウはアカメの攻撃を軽々と避けた。

「感情任せに刀を振っているせいで単調的で

隙だらけだぞ？ アカメ。」

「うるさい!!? 黙れ!!?」

カイドウは煽るようにアカメにそう言つた後、アカメは叫びながら先程より更に憎悪に満ちた刃と瞳を向けるがカイドウはそんな憎惡の瞳と刃を大したことがないと言つた表情をした後、アカメの首をがつしりと掴んだ。

「ぐつ…があ!!?」

アカメが苦しそうな表情をしながらもカイドウに憎惡の瞳を向けてながらも右手に握っていた村雨を更に強く握り締めていた。

「君が僕に憎しみを抱いてくれるおかげで自分が

生きているんだという感覚を感じ味わえ更なる
高みへと近づける」

(こいつは…こいつは…絶対殺してやる…ツ!!?)

例え…差し違えようと…!!?

アカメは村雨で自分自身の首を締め付けている
カイドウの右腕を愛刀の村雨で切り捨ててやろう
と考えていると

「アカメを離しやがれ!!?」

このクズ野郎がああああ!!?」

カイドウが声がする方へ視線を向けると背後には

「バ、バカ…野郎……ツ、あれ程言つただろう…」

レオーネは血塗れの体でうつ伏せの状態で苦しそうにゆつくりと言葉を紡ぐ。

『タツミ』

レオーネがそう言つた後、タツミは剣を構えながら剣の鋒をカイドウに向ける。

「い、命の恩人の姉さんやアカメを…見殺しになんてできるわけないだろう……ッ!!?」

タツミがレオーネにそう言うと

「少年…いや、タツミ……だつたか？」

地に付している彼女の言う通り止めといたほうが良い……それに今のお前の力で彼女達を守れると

思うか?』

「えつ…?」

カイドウの言つた瞬間、タツミは一瞬にして理解した。『目の前にいる人の形をした恐るべき者』、まさに『異形』と呼ぶにふさわしい敵に剣を向けてみて未熟な自分でも分かる。現に自分が持つ剣の手が震えてしまつてゐる。

「それ以前に——」

カイドウは視線をタツミに向けて話した瞬間、一瞬にして消えていた。

「なつ!!? ば、バカな…ツ!!? 消えただと…ツ!!?」

タツミは間抜けな声を上げて必死になりながらも周囲を見渡してカイドウを探す。

そして——

『身の程を弁えろ……半端者め』

「あつ……があ!!?」

タツミが背後を振り返ればカイドウがいてタツミは剣を振りかざそうとするとカイドウの回し蹴りが早かつたのかタツミの腹を思いつきり当たりタツミの身体が勢いよく吹き飛ばされた。

「さて、これで静かになつたな」

カイドウはタツミにそう言つた後、視線をレオーネに向けて一步、また一步進めた。

そしてレオーネの首筋の頸動脈にレオーネの血で染まつた冷たい漆黒の狂刃の刃を当てる。

「アカメだけは生かしてやるからお前達は安心して首を刎ねられて死んでくれ」

カイドウはレオーネにそう言つて首筋に当てていた漆黒の刃はまるで死の宣告を告げる狂氣の刃に見えその刃は少しづつと上に上げられていきレオーネの首筋目掛けて振り下ろそうとする。

だが、

「ツ!!? これは……」

カイドウは素早くレオーネから離れて二、三回
刀を振る。

するとキン!!? キン!!? と高い音と小さな火花が
この屋敷の主人や誰もいなくなつた大量の死体と
人間の血塗れの真つ暗な屋敷の庭の中で響き渡り
飛び散つた。

「ちよつと!!? うそでしょ!!?」

屋敷の屋根の上から少女の声が聞こえたタツミ
は視線を屋根の上に向けると両手で銃を持つて

汗を流し驚いた表情をしたピンクの髪の女性がいた。

あり得ない：本当にあり得ないわ：だつてこんなにあつさりと私の撃った弾丸を全て真っ二つに切り捨てられるなんて……ツ!!？

「そこか」

「——ツ!!？」

ピンクの髪のツインテールにまとめている勝ち気な性格少女は初めてのことだったのか少し戸惑つた表情を浮かべているとカイドウが氷のような冷たい一言を発して視線をピンクの髪の少女に向けた瞬間、ピンクの髪のツインテールにまとめている少女の身が「ゾクリ!!？」と寒気を感じた。

寒いからじやない。カイドウを見て人間の本能だろうかとてつもなく寒気を感じる。

ピンクの髪の少女が考えていると

「敵を目の前にして考え方とはなあ…随分と余裕があるんだな…小娘？」

「しまつ!!?」

少女が驚いた表情を浮かべて死ぬ覚悟をしたのだろうか瞳をギュー!!? と瞼を強く瞑つていた。

すると——

ガチーン!!?

(えつ…?)

少女は内心驚いていた。

何故なら自分はもう助からないと思つて諦めて死を受け入れようと覚悟をしていたというのにいつまで経つてもカイドウの刀が自分の身体に当たり切り捨てる気配はない。

そして

『大丈夫か、マイン?』

カイドウとは違う男性の声が聞こえてきた。

『あ、貴方は…ブラーート!!? どうして此処に!!?』

マインは驚いていた。何故なら目の前にいるのは白い鎧を身に纏つた槍を持つていた筋肉質の大男の男性。ブラーートは自分達がいる悪臭が漂い蠅が飛ぶ血肉で染まつた悪趣味な屋敷の庭の中、自分達とは反対側に居たはずだったからだ。どれだけ急いでも時間がかかる筈だからだ。

「約束の時間になつてもマイン達が来ないから嫌な予感がして急いできたんだよ」

ブラーートは槍を構えながら視線を目の前に向けてマインと会話する。

「しかし……覚悟はしていたけど……まさか、

『狂刃のカイドウ隊長様様』がいるなんてなあ……」

ブラーートがカイドウを睨むように視線を向けて
そして周囲を見る。血塗れでうつ伏せになつて
倒れているレオーネや身体中に傷だらけで横腹を
押さえているアカメや唇や口の中を切つたから
だろうか口から一筋の血を流して倒れているタツミ
に向けながら再度視線をカイドウに向ける。

「これは、お前がしたのか……？」

——カイドウ。

ブラーートがカイドウにそう聞くとカイドウは

「ああ、そうだ：お前の言う通りだよ、
『百人切りのブラーート』」

ブラーートは元は帝国の有能な軍人だった。

だが、随分前に消息を絶つたと噂を聞いている。

理由は予想が付く。それは帝国が腐っていることだろう…そして『あの人物』を連れ去られたからナジエンダに革命軍にスカウトされて諸悪の根源である大臣、オネストをアカメの言葉を借りるなら『葬る』為だろう。

「なんで…こんな惨いことをしたんだ…ッ!!?」

ブラーートには許せない光景だったのだろう。
『誇り』も『矜持』などが全くないのは目の前
の光景を見ればすぐに分かる。

「何故…？ 隨分とおかしなことを聞くんだな、
ブラーート」

弱つている者の身体にあの漆黒の刃で容赦など
一切なく何度も突き刺した傷口とカイドウが
持つている血の滴る漆黒の刃を見て一瞬にして
理解した。

『理由なんてない。ただ敵を切り捨てるだけ』

そして——

『生きるか死ぬかのギリギリのスリルを味わい

心を満たす為だと』

ただ、それだけだった。

ブラーートがそう考えていると

「カイドウ：カイドウウウウウウウ!!?」

視線を向けると傷だらけで血塗れなアカメが
愛刀である村雨を杖代わりにしてフラフラで
大量の出血多量で今にも死ぬかもしれない状態
でカイドウを睨み付けながら血で濡れた両手で
村雨をギュ!!?と握りしめてながら憎悪の雄叫び
を上げながら構える。

すると——

ピイーー!!? ピイーー!!? ピイーーー!!? !!?

背後から笛のような音が聞こえた。

「おい、通報があつた屋敷はこの屋敷か?」

「はい!!? 間違いありません!!?」

どうやら帝国の警備隊がアリア邸の入り口にいる
ようだつた。

「ちい…」

こんな時にタイミングよく警備隊が来るなんて
あり得ない……考えられるとしたらあの家畜、
大臣が『何も知らない幼い陛下』を使って裏で
根回しでもしたのだろう：本当に不愉快な奴だ。

「ヤバイわ!!? 警備隊が近くにいるみたいだけど
どうするのよ!!? アカメとレオーネが傷だらけで
動けない状態で一体、どうやって逃げるのよ!!?」

マインが慌ててブラーートに聞くとブラーートは何か
決意したのか視線をマインに向けて

「マイン、全員を連れてここから逃げろ…」

「ちよつと!!? 自分で何を言っているのか
分かっているの!!? ブラーート!!?」

マインは驚き戸惑っていた。何故なら帝国の将軍、
『エスデス』や『ブドー』などといった『人の枠を
超えた二人の将軍達と同じぐらい要注意人物』だと
ボスであるナジエンダが何度も言つていたからだ。

「なあに、心配するなよ!!?」

上手く逃げ切つてやるからよ!!?」

ブラーートはニヤリと笑いながらマインに言つた。

「く、そ……ッ!!? 急いでブラーートとマインの
援護に行かないと!!?」

レオーネは血塗れで重症の中、更にはうつ伏せ
の状態でブラーートは眺めながらとにかく必死に
なつて立ち上がるこうとするが

「ぐつ!!? がつ!!? がはつ!!?」

身体が動けない。それどころか、警備隊が
もう近くまで来ている。もう駄目だ。助からない…

レオーネは自分の死を覚悟していると

「姐さん、大丈夫か!!?」

レオーネの近くに『男性の声』が聞こえてきた。

『ラバ：か、』

レオーネがそう言うとラバと言われた髪の色は黄緑
で、左目は前髪で隠れている男性がレオーネを心配
そうな表情を浮かべながら応急処置をしていた。

「痛いだろうけど…我慢してくれよ」

「私のことはいい…ツ॥？」 それよりも、アカメを
止めてくれ!!?」

「大丈夫だよ。アカメの所にはブラーートと
マインちゃんだけじやないから」

ラバはそう言つておんぶする。

「姐さん……」

ラバがレオーネを呼び真面目な表情をしていた。

「ど、どうした…?」

レオーネが心配そうな表情でラバに聞くと

「お…」

「お？」

『お、重い…ッ!!?』

ラバがそう言つた瞬間、ラバの頭に今迄にない程の痛みが頭に伝わってきた。

「じゃあ、行つてくるぜ!!?」

「ツ!!? 待つて!!?」

ブラーートはそう言つて純白のマントを翻して
カイドウ元へ向かおうとするとマインは何か
気が付いたのかブラーートのマントを握り締める。

「だ、だけど早く助けに行かないと!!?」

ブラーートは慌てた表情を浮かべながらマインに
言うと

「大丈夫よ。『彼女』も来たみたいだから、

それにすぐに撤退できるように準備しといて
ちようだい」

「それって、どういうーー」

ブラーートがどういうことか疑問を聞こうとした
瞬間、マインが右腕を上げて人差し指をカイドウ
に向けるとブラーートも視線をそちらに向ける。

「さてと、煩くて鬱陶しい狙撃の銃弾がやつと
止んだようだな…」

カイドウがそう言つて漆黒の刀を肩に置いて溜息
を吐いていると

「あの…すみません…」

「ん？」

カイドウは背後から聞こえる声に反応して振り返った。

すると目の前には『チャイナドレスに身を包んだメガネを掛けた女性』が立っていた。

「貴方が、狂刃のカイドウさんですか？？」

チャイナドレスに身を包んでメガネを掛けた女性がカイドウに冷たい声でそう言うと右手にはべつたりと『血で真っ赤に染まつた巨大な鍔』をガリガリと地面に引きずりながら持っていた。

「ごめんなさい…今から貴方を殺します」

チャイナドレスに身を包んでメガネを掛けた女性が両手で巨大な鍔を掴んで戦闘態勢を取つて構えていた。

「そうか…じゃあ——」

カイドウがそう言つた瞬間、チャイナドレスに身を包んでメガネを掛けた女性が予想外だつたのか眉をピクリと反応していた。

「せいぜい必死に無様に足搔いて」

そして——

カイドウは漆黒の刀を握りしめてチャイナドレスに身を包んでメガネを掛けた女性に視線を向けてゆつたりと歩みを進める。

「ツ
!!?」

チャイナドレスに身を包んでメガネを掛けた女性は驚いていた。

何故なら

「どうした?
顔色が真っ青になつてているぞ?
先程のようく余裕を持った表情をしたまえ」

【帝具】『万物両断エクスタス』の使い手
ナイトレイドのシェーレ。

カイドウが笑顔でシェーレにそう言うとシェーレは一瞬にして背筋からゾクリと寒気を感じて更には冷や汗ダラダラと流れて一向に止まらない。

それどころか自分の名前さえも知っているのだから嫌な予感が頭の中に過ぎる。

もしかしたら帝国のましてやオネストたちの勢力に『自分達の情報』がバレてしまつたのではと心の中は風船のように少しづつと膨らんでいく。

「少し喋り過ぎたな……」

カイドウは「はあ…」と溜息をついて「さてと…」と言つて漆黒の刀を構えて

「遊びは終わりだ…望み通り殺してやる」

「ツ!!?」

カイドウはそう言つた瞬間、シェーレは戸惑つていた。

(な、なんのこれ…ツ!!?)

何故ならカイドウの異常な威圧を感じて手を震わせながら少しずつ視線を逸らさず後退つていた。

そんなシェーレを見たカイドウはまるで血に飢え血を吸い上げ狂気に染まつた漆黒の刃を構えた状態で突っ込もうしているとシェーレは帝具である万物両断エクスタス構えていると

「――ツ!!?」

き、消えた…!!? 一体、どこで…?

シェーレが内心焦つていると

「こつちだ…薄鈍」

「そ、そんな!!?」

シェーレは背後に声が聞こえるので振り返ると信じられないと言った表情を浮かべていると

「お前に用はない…早々に去ね」

カイドウはシェーレに漆黒の刀を容赦なく向けてそして切り捨てようとするが、さすがは帝国を震わせる暗殺集団ナイトレイドといったところだろうかギリギリだが万物両断エクスタスで重い斬撃を防ぐ

「ぐつ!!?」

シェーレが苦しそうな表情と声で出して
カイドウから距離を置こうと離れるが

「逃がさん」

カイドウはそう言つて更にシェーレとの
距離を詰める。

(まずは一人目:ツ)

カイドウはそう思い更なる斬撃を繰り出そ
とすると

「もらいましたツ!!?」

シェーレは意図的に今のこの状況を狙っていたのか待つてました言わんばかりに万物両断エクスタスを何の躊躇いなく力任せに振るう。

そう、彼の漆黒の刀よりも私の帝具エクスタスの方が距離をリーチを取ることが出来る筈だ。

シェーレはエクスタスの刃を広げてカイドウに向けて胴体を切り捨てようとしていた。

しかし

「鈍いな、欠伸が出る……」

カイドウは溜息を吐いて軽々とシェーレを赤黒く染まつた鍔の刃を避ける。

「う、嘘…ッ!!?」

シェーレが信じられないといった表情をしたいた。何故ならカイドウの胴体を真っ二つに切り捨てたと確信していたからだ。

なのに、カイドウはそんなシェーレが振るう赤黒く染まつたエクスタスの刃の攻撃をギリギリの距離で身体を横にして何事もなかつたように平然と避けたからだ。

(避けられた…ッ!!? 早く距離を取らないと!!?)

シェーレが急いで距離を取ろうとするが

「逃がしてやるとでも思うか?」

「——ツ!!?」

カイドウはシェーレのそんな行動を予想して
いたかのように少し先回りされていて声に
ならない声を出していた。

「邪魔だ。少し静かにしてろ…」

カイドウは回し蹴りをしようとすると

「静かにしているのはあんたの方よ!!?」

マインがそう言つて叫びながらカイドウに向けて
銃何度も発砲する。

「くだらん、子供騙しの小細工を……」

カイドウはシェーレから離れてマインが発砲した大量の雨のような弾丸を漆黒の刀で切り捨てる。

「なめんじやないわよ!!?」

マインは「ギリっ!」歯軋りをした後、そう言つて更に銃弾をカイドウ発砲する。

「マイン……」

シェーレは息を切らしながらマインの名前を呼ぶと

「大丈夫か、シェーレ」

シェーレは自分の名前を呼ばれてびっくりしながらも上を見上げると

「ぶ、 ブラート…？」

目の前には自分と同じ同業者であるナイトレイドの一人であるブラートがいた。

「シェーレ、 撤退だ」

「そう、 ですか：分かりました。 撤退しましょう」

シェーレがそう言つた後、 何かを思い出したのか

「ブラート、 アカメは一体、 どうするのですか？」

シェーレがそう言うとブラートは一瞬、 戸惑つた表情をしたがすぐに表情を戻して

「安心しろ!!? 僕が無事に連れて帰つて来る…ツ!!?」

ブラーートは笑顔でシェーレにそう言つた後、
ブラーートはその場を後にした。

「う、嘘でしょ…? こんなこ、ことつて…!!?」

マインの額からダラダラ汗を流していた。

何故なら

「もう終わりか? なんともーー」

「ふざけんな!!?」

パン!!?

パン!!?

パン!!?

どうして…どうして…どうしてツ!!?

「どうして死なないのよ!!?」

カラーン、カラーン、カラーン：

マインが叫んだ瞬間、何かが落ちる音が三つ
聞こえた。

「なんとお粗末でつまらない狙撃だ…」

カイドウはマインに視線を向けてそう言つた。

大臣（肉塊）から帝国を震え上がらせる最悪の暗殺集団、ナイトレイドの話を聞いた時には楽しみにしていたけど、これほど弱いとは……：

（もうこれ以上付き合う理由はないな）

カイドウは内心そう呟きながらマインの狙撃される弾丸の雨を刀で何事もなかつたかのように切り捨てながら『ある場所』に向かう。

「ぐつ、ぐつ…うつ!!?」

アカメは身体中にある切り傷のせいか戦闘態勢
どころか立ち上がるのが困難だつた。

(は、早く!!?　早く立たないと…ツ!!?)

それでもアカメは愛刀である村雨を杖のようにして
生まれたての子鹿のようにプルプルと足を震わせて
いた。

そんな中

「ほーう、まだ、生きていたのか……」

カイドウは目の前のアカメを冷たい瞳で見ながら
そう言つた後、一步一歩と歩いてアカメの元へと
向かう。

何故だ：何故、殺せないんだ：ツ!!?

そして何より奴は自分をいつでも殺せる筈なのに
手を抜かれていて相手とすら思われずにいるのだ：
なんたる屈辱!!? これ程の屈辱があるだろうか：ツ!!?

「手を抜かれて更には手加減をされて屈辱か?」

「——ツ!!?」

カイドウはアカメに視線を向けてそう言うと
アカメにとつてはとても不愉快だつたのか顔を
憎悪に歪ませながら殺意を込めた刃の鋒を
カイドウに向けていた。

「殺すか殺されるそんな時に主導権を握れず

今日の前で地に伏している弱者であるお前が

僕を殺す？

國を正す？」

カイドウは自分自身に刀の鋒に向いている
アカメにそう言つてアカメの近くきた後、

「巫山戯るな…」

「ぐつ…!!?」

カイドウは右手でアカメの首元をガシツ!!?と掴み締め付けると憎しみがこもった瞳で睨んでくる
アカメを目についてもカイドウは更に話しを続ける。

「そもそも、『心の正しさ』は誰が見決める?
そして何の権限があつてそれ等を『善悪』と
決めつけるのだ?」

カイドウが冷たい声で『正しさ』や『善悪』についてアカメに問うと

「…………るな」

「ん? なんだ? 言いたいことがあるなら

今ここではつきりと言えばいいだろう?」

カイドウは悪魔のような邪悪な笑みを浮かべてアカメを挑発していた。

「ふざけるな!!?」

アカメはカイドウの腹部に容赦なく蹴りを入れる。

だが、

「だから何度も言つた筈だぞ?」

感情に身を任せたな、と——

カイドウはそう言つてアカメの足首を掴んでいて呆れと落胆した表情をしながらアカメを見て

「がつ!!?　がはつ…ツ!!?」

アカメをアリア邸の壁に叩きつけた。

そのせいかアカメは身体が動かせなかつた。

「アカメ…何故、殺せないか分かるか?」

カイドウはアカメにそう言つてアカメの胸元を掴んで自分自身に引き寄せた。

「まずい!!？」 カイドウの野郎!!？ アカメのところに
向かいやがった!!？」

ブラーートはカイドウがアカメのところに向かつて
行くのを見て慌てた表情を浮かべながら急いで
アカメの元に向かわねばと槍をクルクルクルと
綺麗な円を描くように回してながら槍を構え直す。

「マイン、すまないが俺もアカメのところに
行つて回収してくる!!？」

「分かったわ。 レオーネもラバが回収したから
後はアカメを回収すれば撤退できるわ。」

頼むわよ?」

「ああ!!? 言われなくても分かっているぜ!!?」

ブラーートはマインにそう言つて屋敷の屋根から
降りた。

しかし、今の場所からアカメのところまでの
距離では確実に間に合わないと分かっている
ブラーートは『ある決意』した。

「クソオオオオオオ!!? ヤケクソだああああ!!?」

ブラーートがそう叫びながら細いバルコニーの
手摺りになんとかギリギリ飛び移り

そして

「間に合ええええええええええ!!..?」

ブラーートはバルコニーの手摺りを足場にして
更に勢いを上げる。

そして目の前には

「ツ!!?　　ぶ、ブラーート…だ、と…?」

アカメとカイドウの二人がいた。

そしてブラーートがすぐに来るなんて思つて
いなかつたのか少し驚いた表情を浮かべいた。

「——ちい!!?」

そして鞘から漆黒の刀を抜刀して構えた。

そして——

ガチーノ!!?

漆黒の刀と刃が赤く染まつている槍が
ぶつかり合つて火花が散つていく。

ブラートは叫びながら更に槍に力を入れる。

「くつ!!?
クソオオオオオオオオ!!?」

こんなチャンスは二度とないだろう…例え

殺せなくても最後に一矢報いられれば…ツ!!?

パキツーーツ!!?

「——ツ!!?」

『アカメの復讐の執念の結果』なのかそれとも
『ブラーートの命をかけた執念の結果』だろうか
分からぬがカイドウの使つている漆黒の刀に
亀裂がピシリと入つていた。

カイドウが使つていた漆黒の刀にヒビが入つたのを見
て少し驚いた表情をしているのが分かつた。
だから——

そして、遂に——

パリーノ!!?

狂刃の漆黒の刀を粉碎した。

そして傷だらけのアカメを背中に背負つて
カイドウがいるその場を離れた。

一分一秒でも早く離れなければ!!?

でないと殺される…!!? 刀を破壊できたとはいえ
相手は『エスデス』や『ブドー』に『並ぶ最凶の
人物なのだ。』それに目の前結果はただ運が良くて
奇跡が重なつて起きたに過ぎないことは自分自身
でも分かるからだ。だから逃げなければ!!?

ブラートは全力で逃げている時、『ある違和感』
に気付く

それは——

(追つて……こない……?)

ブラーートが恐る恐ると背後を振り返ると

「……」

カイドウは折れた漆黒の刀ただ眺めるように見つめていた。

だが、

(チャンスだッ!!?)

むしろ好機だ。俺達に興味がないならむしろ
その方が『生存する確率』が更に上がるという
ことなのだから

だが、新たな問題がブラーートを困らせる。

「ぶ…………ー…………と……」

「あ、アカメ…?」

ブラーート恐る恐るとアカメに声掛けると

「…ブラーート…ツ、頼みがある…」

「た、頼み…?」

何故か分からぬが：いつものアカメとは
違う気がした…

『カイドウを……カイドウをこの手で
葬らせてほしい……!!?』

……は？ 何を言つてゐるのだ…？

「アカメ!!? 何言つてるんだ!!?」

そんなの駄目に決まつてんだろ!!?』

俺達『ナイトレイド主戦力の複数人でカイドウを
相手しても顔色一つ変えずに何事もなかつたかの
ように平然している『怪物』：いや、『化物』
なんだぞ!!? 『勝てるはずがない!!?』

『ブラートこそ一体、何を言つてゐるんだ!!?』

あの口クでなしの悪鬼の漆黒の刀が折れて獲物がない今こそ葬るチャンスじやないか!!?』

ブラーートがアカメを落ち着かせようと言うが
アカメはいつものように冷静な状況判断が出来る
ような精神状態じやないとブラーートは一瞬にして
理解した。

『アカメはカイドウに執着しているのだと』

「ブラーート!!? 勝機を見定められなくなるなんて
失望したぞ!!? ブラーー」

バシン!!?

アカメの右頬に鋭い痛みが走った。

「いい加減にしろ!!?」

「ツ!!?」

「それに周りを見てみろ!!? お前には他の奴らが傷だらけでいる仲間達の姿が見えねえのか!!?」

ブラーートがアカメにそう言うと周りを見る。

そこには傷付いている傷だらけのナイトレイドの仲間達がいた。それどころか入り口には警備隊達が今にも入ってきそうな雰囲気も気づいた。

「ブラーート…すまない…冷静じやなかつた」

アカメの言葉で内心ホツと安堵していた。

これ以上戦い続ければいくら帝国を震え上がらせた暗殺集団ナイトレイドであっても死者が間違いなく出でしまうだろう。それ以前に刀を破壊したとはいえ、まだカイドウ手のうちが分からぬのだから手が出せない。

「撤退するぞ」

ブラーートはそう言つた後、アカメを抱えた状態でバルコニーなどを足場に使って屋敷の屋根の上に飛び移つていく中、アカメは視線をカイドウに逸らさず向けていた。

二度と忘れないようになー

そして、

いつかこの屈辱を注ぎこの刃をあの男の首筋に
向けて復讐を果たすためにアカメは心でそう復讐心
と決意が混ざり表情は悔しさに歪ませながら唇を
噛み締めていた。

『いつか、あの悪鬼をこの手で葬る為に…ツ!!?』